

## 歴史と物語 『伊勢物語(初冠の段)』を読む

東京情報大学名誉教授  
松田 喜好

### はじめに

さて、本日は折角の機会ですので、私の専門分野であります日本の古典文学、『伊勢物語』を通じてお話しさせていただきます。この講義が、皆様に日本の古典文学の面白さ、奥の深さを味わっていただく端緒となれば、望外の幸せです。

## I. 『伊勢物語』とは？

日本の古典文学と言えば「枕草子」や「源氏物語」などを想起されることと思いますが、『伊勢物語』は、これらに先立つこと約50年前に成立し、「伝奇物語」の草分けである「竹取物語」と並んで、初期の平安文学を彩る、最初の「歌物語」(後注)です。

### 1. 『伊勢物語』の概要

- A. 成立時期・作者：平安時代の貴族や文人から高く評価され、当時の常識・教養の原点とまで目されてきた『伊勢物語』ですが、その成立時期・作者等肝心なことは現代では諸説あって、確立した定説はなく、一般には「未詳」とされています。この作品の時代的な重要性、内容の面白さ、後世の日本文学に与えた影響の大きさ等から考えると、誠に不思議なことです。しかし、私は、成立時期は西暦950年(天暦4年)頃、作者は在原業平か紀貫之(少なくとも主要部分は)と考えております。
- B. 作品の性格：仮名・漢字交じりの文字で書かれた「歌物語」[I-2-C-(2)参照] です。
- C. 構成：第1段「初冠」(うひかうぶり＝元服)の段から始まり、第9段には有名な「東下り」の段があり、最終の第125段「つひにゆく道」(遂に逝く道＝臨終)で終わる全125の章段からなる、和歌を中心として展開する、「むかし、をとこ(昔、男)」の一代記となっています。
- D. 内容：各章段はそれぞれ主題となるべき和歌を中心として、男女の恋愛・親子の情・旅の趣き・主従関係・友情・など多岐にわたる人間模様が描かれています。
- E. 登場人物：この物語の主人公は、各章段が「むかし、をとこありけり。……」と始まる例が多いことから「男」、または「昔男」とも言われます。他の登場人物も内容からは察しが付く場合でも「人」、「女」など人物を特定することを避けています。しかし、物語の内容などから主人公は、旧くから「在原業平(資料2)」であると解釈されています。後に詳しく説明します。

### 2. 『伊勢物語』の成立に至るまでの文化的な時代背景

#### A. 唐風文化の隆盛

有史以来、文字を持たなかった日本人は、630年(舒明2年)の第一次遣唐使派遣以前から、漢字を中心とする中国文化に深く傾倒し、この唐風重視の傾向は、奈良時代、更には平安時代の初頭に至るまで一貫して続いてきました。その結果、この時代の日本文学は漢字を用いた漢詩文が全てであり、天皇の命令によって国家権力が編纂する勅撰詩歌集は全て漢詩文集でした。①「凌雲集」(814年・弘仁5年)、②「文華秀麗集」(818年・弘仁9年)、③「経国集」(827年・天長4年)＝勅撰三集「和歌」を集めた「万葉集」も表音文字としての漢字を用いていました。

#### B. 国風文化の盛行と『伊勢物語』の誕生

しかし、平安時代の中期に入ると、遣唐使の廃止など、国風文化が優勢になってきました。こうした時代背景のもとで、905年(延喜5年)には日本文学史上初めて、平仮名を用いた倭歌(和歌)の勅撰集「古今和歌集」が編まれることとなり、『伊勢物語』はこうした唐風文化から国風文化への大転換期

という土壌の上に誕生してきた物語なのです。

また、『伊勢物語』は、日本における「歌物語」の嚆矢というべき作品で、後に続く「源氏物語」や「大和物語」などの物語文学に強い影響を与えたほか、「蜻蛉日記」、「和泉式部日記」などの日記文学、更には中世の和歌文学にも幅広い影響を及ぼしています。

### C. 平安時代の物語文学の二つの潮流

(1) 作り物語：中国の隋・唐時代に発達した「伝奇文学」の影響を受けて発達した文学形式で、現実に根差しながらもファンタジック性を色濃く残した物語文学で、『竹取物語(910年頃に成立)』が代表です。「宇津保物語」、「源氏物語」等が続きます。

(2) 歌物語：歌(和歌)の創作時の由来・背景などの前置きの説明文「詞書」(ことばがき)から発生、発展したものとされ、『伊勢物語』はその最も早期のものとして扱われています。「大和物語」、「平中物語」等は同類の作品です。

## 3. 『伊勢物語』の読み方(アプローチ)

一般に「物語」という場合の「物＝もの」は、「全くの嘘でもないが、さりとは本当の事でもない」といった風に曖昧な状況を表しています。『伊勢物語』の「物語」も同様である、ということを大前提として、これからのお話しをお聞き頂きたいと思えます。この物語は西暦950年前後に成立したと私は考えております。したがって今日まで1000年以上も読まれ、語り継がれてきています。これを、次々と量産され消えてゆく現代の小説の数々と比較すると、この古典というものの素晴らしさ、魅力に改めて気付かされます。また、古典文学を読む場合、二つのアプローチがあります。

**A. 現代語訳：**一つは、「古典」が書かれた時代の状況を現代に引き寄せ、蘇らせて理解しようとする読み方です。

**B. 深読み：**もう一つは、現代の我々が「古典」が書かれた時代の世界に入って行って理解しようとする読み方です。この場合は、歴史的な資料等を紐解きながら、作品(古典)成立当時の読者はどのように読み、楽しんでたのかという、当時の人々と同じ目線に立って古典を楽しんでみようというアプローチです。

### 「伊勢物語」初段(初冠)(岩波文庫本)

むかし、をとこ、うひかうぶりして、平城の京、春日の里にしるよしして、狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。このをとこ、かいまみてけり。おもほえずふるさとに、いとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。をとこの着たりける狩衣の裾を切りて歌を書きてやる。そのをとこ、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

かすが野の若紫のすり衣　しのぶの乱れ限り知られず  
となむおいつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑに　みだれそめにし我ならなくに  
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

### 現代語訳(資料6：逐語解説：参照)

#### 第一段「初冠」(うひかうぶり＝元服)

昔、ある男がいた。元服の儀式を済ませて、その男の所領があった奈良・春日の里へ狩をしに行った。その里にはとても美しく瑞々しい姉妹が住んでいた。男はその姉妹を垣根越しに覗き見た。すると思いがけず、その姉妹は古い都には全くそぐわない、美しい女人だったので、男は動転して、すっかり心を奪われてしまった。そこで男は着ていた狩衣の裾を切って、それに歌を書いて姉妹に送った。そのとき、男は信夫摺りの乱れ模様の狩衣を着ていたので、これに心の乱れを掛けて、次のような歌を贈ったのである。

春日野のこの地で、瑞々しく美しいあなた方を見かけたせいで、私の心は今着ている狩衣の信夫摺の乱れ模様のように　すっかり乱されてしまいました

男は元服早々の若い身にも拘らず、なかなか老獪な歌を送ったものだ。この歌は、「古今集」の源融(み

なもとのとおる)の歌

陸奥のしのぶもち摺り誰ゆゑに 乱れそめにし我ならなくに  
を本歌取りしたもので、心憎いほどの出来栄である。昔の人は、このように風雅の心をしっかりと持っていたのである。

## II. 『伊勢物語』を深読みする

以上が「現代語訳」です。これはこれで十分味わい深いのですが、これを更に深読みして「むかし、をとこ」を歴史上実在した「在原業平」（資料2、参考資料2）と置き換えてみると一層深い味わいが出てきます。実際、物語の各章段を通じて語られるエピソードの多くが在原業平に関するもので、しかも業平の目線で描かれていること等から、旧くから『伊勢物語』の主人公は在原業平であると見做されてきたのです。当時の読者は皆そうした目線で読んでいたと思われます。

主人公の「むかし、をとこ」を「業平」と想定して読むのが、昔からの読み方のようです。主人公を「業平」とした途端に物語は一変します。業平が「うひかうぶり」＝成人式を済ませた時に、なぜ奈良の京へ行ったのか、春日の里へ行く理由が何だったのか。こういう読み方が当然に必要なってきます。もし主人公を「むかし、をとこ」のままに読むと、歴史的背景を踏まえた深読みが出来なくなります。業平に置き換えると、そのような読み方が可能となり、またそうしないと物語は面白い展開をなくしてしまうのです。

### 1. 在原業平の人物像

では「業平」とはどのような人物だったのでしょうか。資料(2)をご覧ください。これは正史・『三代実録』の記事の一部で、業平が亡くなった時の記録として書かれた部分です。この歴史書の記述の真偽は兎も角として、他に記録が無いので一応事実と想定して読み進めます。

注：『三代実録』・・・正式には『日本三代実録』と言い、当時の宮廷の重要人物の生前の事績を記録した正史＝国家が正式に編纂した歴史書＝で、最初の「日本書紀」からこの「三代実録」までの六つの歴史書を特に六国史(りっこくし)と言います。(参考資料1)

#### A. 『三代実録』の記録

「…業平は故、阿保親王の第五子にして、中納言行平の弟なり。阿保親王、桓武天皇の女伊登内親王を娶りて業平を生む。…姓在原朝臣を賜ひき…。業平は体貌閑麗にして放縦拘らず。略才学無くして善く倭歌を作る。…卒せし年五十六。」とあります。

B. これに他の資料も併せて、もう少し補強してみると、「…業平は、第51代・平城天皇の孫で、阿保親王の第五子である、母は第50代・桓武天皇の皇女伊都内親王、兄に大江音人・在原行平・仲平・守平がいる。妻は紀有常の娘。妻の妹の夫が藤原敏行。天長2年(825)に生れる。同3年(826)臣籍に下り在原姓を賜わる。元慶3年(879)頃、蔵人頭の重職に就任、翌年5月28日卒去した。56歳。最終官位は従四位上」といった人物像が見えてきます。また「端正な体格で眉目秀麗な美男子であり、物事に拘らないおおらかな性格で、漢詩・漢文の素養はないが、和歌には優れた才能があった」という人物です。

注：末尾に「56歳で死去」と書かれていますが、この記述は重要で、この記述が業平の年齢について書かれている唯一の歴史資料です。他には何処にも有りません。業平の年齢はすべてここから逆算して書かれているのです。

#### C. 実際の人物像

「三代実録」には、「漢詩・漢文の素養はないが、和歌には優れた才能があった」と書かれています。事実、和歌は『古今集』に30首撰録され、六歌仙・三十六歌仙に名を連ねており、日本を代表する歌人の一人です。一方、「才学無し」ともありますが、「才学」とは漢学の素養のことです。業平は「渤海使」の通訳を務めている処から見て、漢才が無かったとは考えられず、和歌の才能があまりに高かったので、漢才の方が相対的に低い評価がなされたものと思われます。

## 2. 薬子の乱と業平の誕生

日本の歴史の中では、新天皇が即位すると、次に誰が立太子(皇太子)するかで、揉める時が多いのです。現代を除く多くの時代もそうでした。平城天皇が嵯峨天皇を譲位する時、平城帝の皇子(次男)高岳親王が立太子しました。業平の父、阿保親王は平城天皇の長男でしたが母方の身分から立太子できませんでした。

810年9月(弘仁元年)の薬子の乱(資料5)の後、皇太子であった高岳親王は連座して廃太子され、すぐに剃髪して東大寺に入ってしまう。(真如法親王=仏典を求めてベトナムまで行った記録がある)阿保親王も当然ながら父の平城上皇に随行して奈良の京へ行ったものと思われます。それで810年9月19日、大宰府へ流されます。その後824年7月7日平城上皇が薨去して楊梅陵(やまもりょう)に葬られます。同年8月9日阿保親王は赦されて帰京しました。そして825年、業平誕生です。この辺の年号は後の説明に密接に関係してきますので、よく覚えておいてください。

## 3. 在原業平の出生の秘密

「阿保親王の第五子」と正史に明確に出生記録が記載されているのに、なぜか業平の出生には昔から疑問符が付けられています。それは、父である阿保親王の履歴(資料3)と母の伊都内親王の履歴(資料4)を読込んでみると、どうしても辻褄が合わない点が出てくるからです。

### A. 資料上の矛盾

**825年(天長2年)業平誕生** ここがポイントです。今までの説明は全てここを説明するための準備だったのです。さて、父の阿保親王は14年間も大宰府に居ました。平城上皇が薨去したのが824年7月7日です。この後すぐに母の伊都内親王は尼になっています。そこで825年に業平が生まれます。この点が『伊勢物語』を読む一番のポイントなのではないかと考えています。

阿保親王と伊都内親王の息子が業平だとしたら、史料的に符合しないのです。阿保親王は824年7月まで大宰府にいます。伊都内親王は824年7月(平城天皇薨去)の後、尼になっています。阿保親王が8月に帰京してすぐに伊都内親王と結婚したとしても、無理でしょう。これを歴史資料から読み解いて行くと、次のような筋書きが見えてきます。

### B. 史実としての筋書き

歴史資料から〈よむ〉と、平城上皇は落髪後も出家はせず、伊都内親王を寵愛していたようです。平城上皇が薨去した後、伊都内親王はすぐに尼となったが、身籠っていたことを知った。そこで、還俗せざるを得なかったのです。(もし尼のままであれば、資料(『本朝皇胤紹運録』)には掲載されません。生まれてくる業平が、罪人である平城上皇の子供であるなどとは一切言えません。そこで平城上皇の長男である阿保親王が引き受けざるを得なかったのです。そして、系図の上では阿保親王の子供(王)となったのです。

こうした史実を踏まえて伊勢物語(初段=初冠)を読むと、「昔、841年、17歳で元服した在原業平が奈良の京にある、実父であり系図上は祖父にあたる、故・平城上皇の陵へ元服の報告に行った。」となります。だから、行く先は奈良でなければ駄目なのです。これを書いた人はもちろん、これを読んだ当時の人々にとって、この件は「公然の秘密」事だったと考えられるわけです。だからこの物語は面白いのです。

物語の舞台は、奈良市の北部で、大極殿の北500m辺りに楊梅陵(やまもりょう=平城天皇陵=奈良市佐紀町)があり、北東1.5Kmに不退寺(金龍山不退転法輪寺=奈良市法連町)があり、業平が開基した寺で業平が奉納した観音像が安置されていると寺伝にあります。これらのことを考え合わせると、業平もしくは阿保親王が治めていた土地がこの周辺であったものとして間違いないでしょう。皆さんが奈良へ旅行する機会があったら、是非この不退寺(業平寺とも言われています)へ立ち寄ることをお勧めしたいと思います。

次に、物語に出てくる「若紫の 摺り衣を着た姉妹」についてですが、業平は紀有常の娘と結婚していますが、もう一人の娘(妹)は、藤原敏行と結婚しています。この二人は大変仲が良いことで知られていて、『伊勢物語』の中の「女はらから」は、どうもこの二人を想定しているようなのです。

#### 4. まとめ

『伊勢物語』は、主人公をただ「むかし、をとこ」として読んでいっても、それなりに面白い物語として読めますが、そこに「在原業平」という歴史上に実在した人物を持ち込んでみると、歴史と関係せざるを得なくなります。業平の父(阿保親王)と母(伊都内親王)の履歴を垣間見てみると、どうも阿保親王と伊都内親王の間には業平は生まれてくる筈がないと思われれます。父は大宰府に居て、母は平城上皇が薨去した後に尼になっています。こういう二人が結ばれる筈がありません。

という訳で、当時から業平には出生の秘密が色濃く残っていました。その辺りが物語としては実に面白い世界になって行きます。この業平の秘密は当時の読者には、ほぼ公知の秘密であったわけです。この物語は当時の天皇も読めば、嵯峨天皇に味方した人々も読んでいたのですから、業平が平城上皇の息子(落胤)である等ということとはとても書けません。ですから、表向きは「むかし、をとこ」とされていますが、この「主人公」を「業平」として見ると、このように面白く読めるのです。

私はこの物語は紀貫之が書いたのではないかと考えています。全部ではありませんが、主たるところは彼が書いたものと私は考えています。奈良時代以前は権勢をふるった紀家も、この時代(平安中期)になるとすっかり零落してしまって、国守になれたのは貫之ただ一人という有様でした。当時、紀家の人間である紀有常の姉に静子がいて、文徳天皇との間に惟喬親王が生まれています(この親王は『伊勢物語』と深い関わりをもちます)。惟喬親王は文徳天皇の第一皇子であるにも関わらず、母が紀家の出身であるだけで天皇にはなれなかったのです。もし彼が天皇になっていたら彼の周辺にいた業平も人生が変わっていたかもしれません。そのようなわけで、中央政界から疎外されていた紀家の人間が「在原業平」という人物に仮託して当時の政界への批判的なものを描いたのが、この『伊勢物語』なのではないかと考えるのです。

特に最初の段(今回読んだ「初冠」の段)は、倉卒の変(葉子の乱)で敗れた業平の実の父である平城上皇を下敷きにして書かれている段なのだ、と読むのが良いのではないのでしょうか。若しくは、そう読めばこの段は実に面白くなります。そしてこの物語がなぜ書かれたのか、誰が書いたのかというヒントが〈よみ〉とれるような気がします。

最後に年譜(資料6)を見て頂きたいのですが、842年7月に「承和の変」という大きな政変がありました。この政変には業平の父である阿保親王も係わり、勝ち組に属してはいたものの、間もなく死去してしまうという事件です。また、866年潤3月10日には応天門延焼「応天門の変」があります。この事件は伴善男(名門の大伴家)が失脚した事件です。これらの平安時代前期の大きな政変が『伊勢物語』の下敷きになっていることも分かります。

時の権力者を表立って批判はできないが、物語の中に仮託して誰かが批判しているのです。この作者こそ、どう見ても業平本人が書いたとは思えませんので、紀貫之であろうと見ているわけです。先程来申し上げていますが、「物語は嘘でもないが、本当でもない話」であることを承知の上で読み、更に歴史的事実と併せて読むと、随所に思い当たるところが出てきます。これが「物語を読む面白さ」の一つなのだ、ということをご理解いただけたら嬉しく思います。

以上で本日の講義を終わらせて頂きます。ご清聴有難うございました。

#### 【質疑応答】

**【質問1】** 太宰の帥とか権の帥とか聞くと、菅原道真を思い起こします。道真は左遷されて太宰府へ行ったと思うのですが、大宰府という役所は中央からは、そんなに軽んじられた役所だったのでしょうか。

**【回答】** 大宰府は、朝廷の鎮西総司令部であり、中国・朝鮮との外交の窓口であり、いつの時代も朝廷にとっては重要な役所であり続けました。太宰帥は長官、太宰権帥は副長官として共に実質的な大宰府のリーダーです。しかし、権帥には例外として中央で失脚した貴族の左遷ポストとして

任命されることがあり、この場合は別に「太宰員外帥」とも呼ばれ、正規の統帥権とは明確に区別されていました。「員外帥」は全く仕事が無い文字通りの閑職で、任命されることは厳しい左遷であり屈辱的なものでした。阿保新王も、100年後の菅原道真もそうでした。

**【質問2】** 平城天皇と伊都内親王は異母兄妹で、阿保親王にとって伊都内親王は血族の叔母にあたると思うのですが、違和感を覚えます。

**【回答】** その通りです。平城天皇と伊都内親王は異母兄妹です。平城天皇の皇子である阿保親王は伊都内親王の甥です。しかし当時はまだ優性学上の知識もなく、特に桓武天皇は、血族結婚に対して別段の違和感を持っていなかったようです。「本朝皇胤紹運録」を見ると実の兄妹を結婚させる等、他にも多くの例が見られます。佐倉市図書館で同書(『群書類聚』正編・第5巻)をご覧になると面白い事が沢山見られます。

### Ⅲ. 資料編

#### (資料1)【三代実録・元慶四年(八八〇)五月二十八日】

「従四位上行右近衛権中将兼美濃守在原朝臣業平卒しき。業平は故二品阿保親王の第五子にして、正三位行中納言行平の弟なり。阿保親王、桓武天皇の女伊登内親王を娶りて業平を生む。天長三年親王表を上りて曰しけらく「無品高丘親王の男女、先に王號を停じて朝臣の姓を賜る。臣の子息は未だ改姓に預らず。既に昆弟の子なり。寧ぞ齒列の差を異にせむや」と。是に於て、仲平、行平、守平等に詔して、姓在原朝臣を賜ひき。業平は体貌閑麗にして放縱拘らず。略才学無くして善く倭歌を作る。〔中略〕卒せし年五十六。」

#### (資料2)「阿保親王」【続日本後紀・承和九年(八四二)十月二十二日】

彈正尹阿保親王薨。親王者、桓武天皇之孫、平城天皇之第一皇子也。(中略)大同之季、天皇禪国於皇太弟(嵯峨天皇)、遷御平城宮。弘仁元年(八一〇)太上天皇心悔、而有入東之謀。親王坐此倉卒之變、出太宰員外帥。經十余年、至天長之初、特有恩詔、令得入京。

(中略)春秋五十一而薨。

#### (資料3)「伊登(都)内親王」【三代実録・貞觀三年(八六一)九月一九日】

無品伊登内親王薨。帝、事を視給はざること三日。内親王は桓武天皇の皇女なり。

【本朝皇胤紹運録】

・平城天皇敬重叙三品。天皇晏駕之後為尼。

#### (資料4)「倉卒の變 [薬子の乱]」

○日本史辞典(角川書店)

桓武天皇の皇子である平城天皇は、大同四年(八〇九)病を理由に讓位する。平城の弟、嵯峨天皇が即位した。上皇となった平城は静養のため、かつての都である、奈良の平城京へ移る。ところが、藤原種継の娘で平城天皇の寵愛を得ていた藤原薬子、薬子の兄で参議仲成を始め公卿・官人等、多くが一緒に移って来た。「二所の朝廷」(日本後紀)。

○大同四年(八〇九)におこった朝廷の内乱。嵯峨天皇即位後、前帝(平城)の寵愛を得ていた藤原薬子はその権勢再現のために兄仲成と上皇の重祚をはかって挙兵を企てたが、翌大同五年(弘仁元年・八一〇)未然に発覚して、鎮圧された。以後藤原式家は衰え、一方藤原冬嗣流の北家は、非公式に設置された蔵人頭となり、繁栄の礎を築いた。

## (資料5) 略年譜

- 806年3月 桓武天皇(五十代)没。平城天皇即位。賀美能親王(嵯峨)立太子。  
809年4月 平城天皇讓位。嵯峨天皇即位。高丘親王立太子。  
7月 無品阿保親王に四品を授く。  
11月 上皇(平城)藤原仲成等をして平城京を造らしむ。  
12月 上皇、平城京に行幸す。  
810年9月 薬子の乱(倉卒の変)  
9月11日 上皇東国に向う。仲成誅せられる。  
12日 上皇薙髪・薬子自殺。  
13日 高丘親王廢太子、東大寺に入る(真如法親王)。  
大伴親王(淳和)立皇太子。  
19日 四品阿保親王太宰権帥(二〇歳)。  
823年4月 嵯峨天皇讓位。淳和天皇即位。  
824年7月7日 平城上皇没(五一歳)。楊梅陵に葬る。  
8月9日 阿保親王、上皇(嵯峨)の勅により太宰より帰京。  
825年(この年) 業平誕生  
826年(この年) 業平臣籍降下して姓(在原)を賜う。  
841年1月 在原業平右近衛将監(元服か・六位相当)  
842年7月 【承和の変】  
10月22日 阿保親王没(51歳)  
847年 業平、不退寺に観音像を安置  
866年閏3月10日 応天門延焼【応天門の変】

## (史料6)『伊勢物語』第一段「うひかうぶり」の逐語解説

・うひかうぶり(初冠=元服) ・春日の里(奈良県・春日大社付近) ・しるよしして(領るよし=土地を領有して) ・なまめく(みずみずしい/若々しい) ・女はらから(姉妹) ・垣間見(垣根越しの覗き見=結婚の儀式の第一段階)。女が一旦、裳を着たら(裳着)=一人前の女になる=男親でさえなかなか会えない。男は元服して一人前の男~稚児時代は男女同じ服装 ・おもほえず(思いがけず) ・ふるさと(奈良平城京のこと~794 平安遷都) ・はしたなく(その状況にそぐわない=古びた奈良の京にそぐわない) ・心地まどひ(気持ちが動転して) ・狩衣(かりぎぬ=公家の普段着~闕腋袍(けっぺきのほう)=動きやすいように前・後の見頃(上着の胴体部分)が離れている。かしこまった時は=縫腋袍(ほうてきのほう)=前後の見頃を縫い合わせてある。 ・歌を書きてやる(最初の申し込みの歌には必ず断りの歌が来る 断りの歌がその後のお付き合いの始まり) ・しのぶずり(信夫摺=福島県北東部の里で生産された織物=糸を撚って織ってある) 信夫摺の狩衣(あまり高価なものではない=織り目が粗いが丈夫である) ・若紫(若くて美しい女性) ・すり衣(摺り衣=白地に草木染料で花鳥などの模様を染め付けた布・その布で織った衣服) ・限りしられず(我慢ができない) ・おいつきて(老いつく=老獐にも) ・『みちのくの忍ぶもぢずり……』(古今集 源融の歌) ・心映え(上手い具合に本歌取りしたもの) ・いち早く(激しい・強い) ・みやび(雅・平安以前は《唐風》を意味していたが、この時代になると国風化が強まり、《宮廷風》へと語意が変わってきている。都の美。対立語は、鄙び)

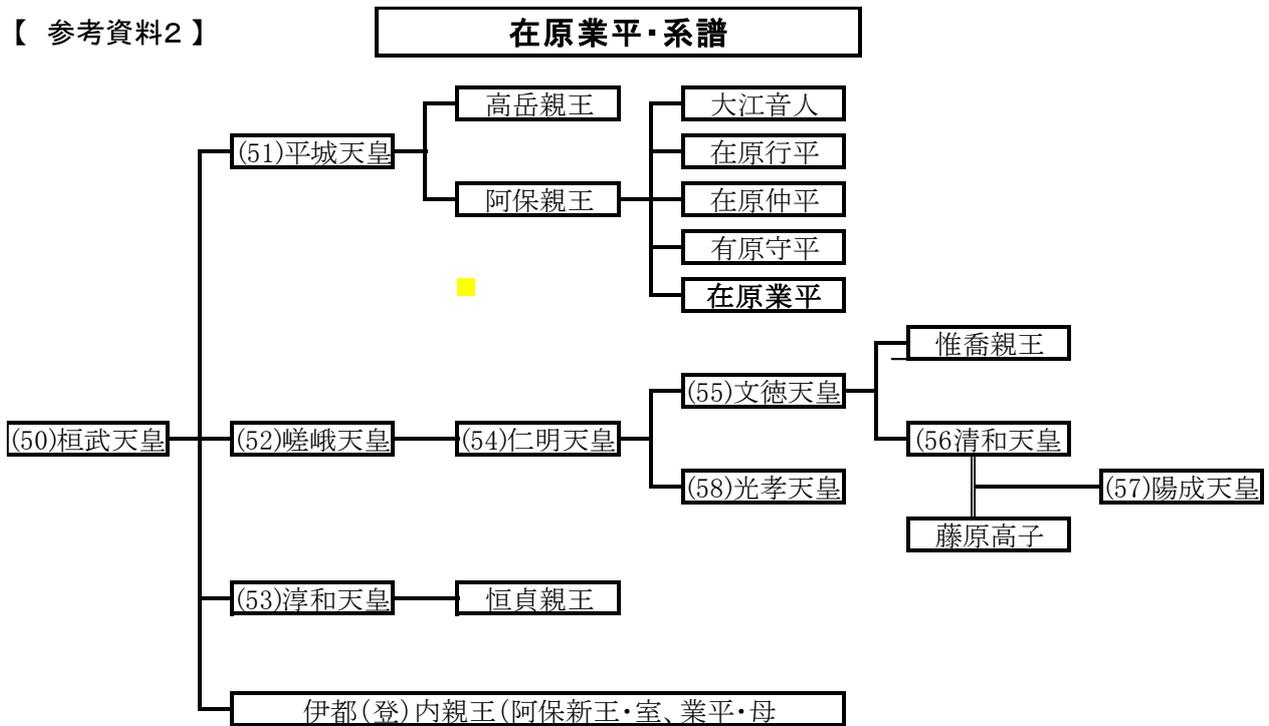
[参考資料 1]

上代・中古代の主な歴史書・文学作品 略年表(要点のみ)

年号		歴史書・神話	勅撰詩歌集		物語	日記	記事
西暦	和暦		漢詩集	和歌集			
712	和銅 5	(古事記)					
713 頃	6	(風土記)					
720	養老 4	日本書紀					六国史
751	天平勝宝 3		(懐風藻)				
~759	天平宝字 3			(万葉集)			
797	延暦 16	続日本記					六国史
807	大同 2	古語拾遺					
814	弘仁 6		凌雲集				勅撰三集
818	9		文華秀麗集				勅撰三集
827	天長 4		経国集				勅撰三集
841	承和 8	日本後記					六国史
869	貞観 11	続日本後記					六国史
879	元慶 3	文徳天皇実録					六国史
901	延喜元	日本三代実録					六国史
905	5			古今和歌集			八代集
~910	10				竹取物語		
935 頃	承平 5					土佐日記	
950 頃	天曆 4				伊勢物語		※
951	5			後撰和歌集			八代集
951 頃	5				大和物語		
965 頃	康保 2				平中物語		
974~	天延 2					蜻蛉日記	
~984	永観 2				宇津保物語		
989 頃	永祚元				落窪物語		
1000 頃	長保 2				(枕草子)		
1004~	寛弘元					和泉式部日記	
1005	2			拾遺和歌集			八代集
1008 頃	5				源氏物語		※
1010~	7					紫式部日記	
1018 頃	寛仁 2		(和漢朗詠集)				
1028~	長元元				栄華物語		
1059~	康平 2						
~1060	3				夜の寝覚		
1080 頃	承暦 4				狭衣物語		
1086	応徳 3			後拾遺和歌集			八代集
1094~	嘉保元	(扶桑略記)					
1108~	天仁元					讃岐典侍日記	
1120 頃	保安元				今昔物語集		
"	"				大鏡		
1127 頃	太治 2			金葉和歌集			八代集
1151 頃	仁平元			詞花和歌集			八代集
1170					今鏡		
1188	文治 4			千載和歌集			八代集
~1216	建保 4			新古今和歌集			八代集

( Wikipedia より抜粋 )

【 参考資料2 】



【 松田喜好（まつだきよし）先生 プロフィール 】

【現職】 東京情報大学名誉教授

【専攻】 日本古典文学・日本文化史

【略歴】 1945年 山形県村山市に生まれる。二松学舎大学大学院博士課程修了  
東京情報大学勤務(現在・定年退職)

【主な著書】

- ・研究書
  - 『伊勢物語考Ⅰ』（笠間書院 平成1年9月）
  - 『伊勢物語考Ⅱ』（笠間書院 平成6年6月）
  - 『伊勢物語(秘められた背景)』（鼎書房 平成14年4月）
  - 『源氏物語の基礎知識』（至文堂・共著 平成11年1月）
  - 『歌語り・歌物語事典』（勉誠出版・編集 平成9年2月）
  - 『枕草子大事典』（勉誠出版・編集 平成13年4月）〔その他〕
- ・教養書
  - 『ことばの知識』（笠間書院・共著 昭和53年3月）
  - 『他人に聞けない文書の書き方』（日東書院 昭和56年3月）
  - 『手紙一文例・マナー事典一』（主婦と生活社・共著 昭和58年12月）〔その他〕